



ゲート SEASON2

自衛隊 彼の海にて、斯く戦えり

3. 熱走編〈上〉

α L P H α L I G H T

柳内たくみ

Takumi Yanai

アルファライト文庫



Main Characters **主な登場人物**



シャムロック・ハ・
エリック

ティナエ政府
最高意思決定機関
『十人委員会』のメンバー。



メイベル・
フォーン

亜神ロウリィとの戦いに敗れ、
神に見捨てられた亜神。
徳島達と行動を共にする。



徳島
甫
とくしま はじめ

海上自衛隊二等海曹。
特務艇『はしだて』への配属
経験もある給養員(料理人)。



ドラケド・
モヒート

アヴィオン海^{アヴィオン}の海賊七頭目の
一人。義理人情に篤く、
部下に慕われる。



オデイル・
ゼネヴュル

ドラケ海賊団オデイル号の
船守りを任される漆黒の
翼皇種^{アヴィ}の少女。



オデット・ゼ・
ネヴュル

翼皇種^{アヴィ}の少女。
戦艦オデット号の船守り。
プリメーラの親友。



江田
島五郎
えだじまごろう

海上自衛隊一等海佐。
情報業務群・特地担当統括官。
生粋の“艦”マニア。

その他の登場人物

レディ・フレ・バグ 海に浮かぶ国アトランティアの女王。

ダーレル・ゴトーハン アヴィオン海^{アヴィオン}の海賊七頭目の一人。

濱湊伸朗^{はまみなと のぶろう} 海上自衛隊ミサイル艦隊司令。

黒須智幸^{くろす ともゆき} 海上自衛隊ミサイル艇『うみたか』艦長。

高橋健二^{たかはし けんじ} 海上保安庁一等海上保安正。

アマレット プリメーラ付きのメイド長。

イスラ・デ・ピノス シャムロックの秘書。



アーチ
シュラ・ノ・

帆船アーチ号船長。
正義の海賊アーチ族。
プリメーラの親友。



プリメーラ・
ルナ
アヴィオン

ティナエ統領の娘。
極度の人見知りだが酒を飲む
と気丈になる『酔姫』。

特地アルヌス周辺

●ロンデル

帝都●

●イタリカ

◎アルヌス

碧海

グラス半島

エルベ藩王国

クンドラン海

トユマレン

●メギド

アヴィオン海

碧海



序

特別地域／アヴィオン海とクンドラン海のほぼ境あたり／北緯二八度二四分・東経二二度五三分

ロンデル標準時間〇五三五時――

蒼穹に浮かぶ白い機体。

雲の隙間から姿を現しては隠れ、また現すを繰り返すそれは、P3C哨戒機。海上自衛隊・特遣派遣海賊対処行動航空隊所属の隊員達が乗り込む機体であった。

彼らは眼下の蒼海で起きている出来事を監視していた。

「TACCO（戦術航空士）！ 民間商船二五隻と、海賊の帆船が、ひいふう……
「一、いや三……合わせて「三隻見えた！」

双眼鏡片手に、小さな窓に張り付くように海上を監視する隊員達が目にしたのは、逃



げる商帆船団と、それを追う海賊帆船の群れという光景である。

追う側が海賊だと分かったのは、揃って黒い帆を掲げているからだ。

存在そのものが人倫や法律に反する海賊達だが、彼らも仕事の際は自分達が何者であるかを示すというルールだけは健気に守っていた。

TACCOは状況を把握すると、航法兼通信を担当するNAV/COMMに対し、テナエ共和国の首都ナスタに置かれた海賊対処行動航空隊司令部に速やかに報告するよう命じた。

『司令部、ユラヒメ〇二。哨戒エリア〇四六六にて海賊に襲われている商船団を発見した……』

そうして改めて窓から海面を見下ろす。

海賊の帆船が、激しい砲撃の噴煙を上げていた。

発射されているのは、炸裂しない純然たる金属の塊だ。しかしその威力は想像以上に凄まじく、商船に直撃すると船体を構成していた木材が破片となって辺りにまき散らされた。

周囲の碧い海面には、倒れ落ちたマストや白い帆、こんがらかった索具といったものがゴミのごとく浮いている。そしてその隙間には、動かなくなった人型の何かが無数に

浮かんでいるのも認められた。

「これは酷いな」

「くそっ……」

商船の甲板上（日本では、シビリアン籍の船の甲板を『こうはん』と読む習慣がある。由来は不明）では、乗組員が剣を振るい必死になって海賊と戦っている。

だが多勢に無勢、戦いは海賊の側が優勢だ。既に抵抗力を失い拿捕された船では、海賊達が勝利の雄叫びを上げ略奪を始めていた。

「おい、あれを見る」

略奪の対象は荷物だけではない。

乗客として乗り合わせていたと思われる男女、子供達が海賊によって力ずくで船倉から引きずり出されている。みんな懸命に抵抗しているが、ならず者にはとても敵わない。このような粗暴な海賊行為は、銀座側の世界では過去のものとして映画のワンシーンに登場するだけだ。それだけに隊員達には、この光景が今ひとつ非現実的なものに見われたのである。

「くそっ、この世界の海軍は何をしてるんだ？ 船団に護衛船も付けないのか!?」

「いや多分、あれが地元海軍の艦艇です」

P3Cは周囲を旋回し、監視を続けた。

この世界の海では一般商船と戦闘艦を見た目で区別するのは難しい。帆船といってもマストの数や帆の形状、枚数など様々な種類があるし、どの船も自衛を目的とした武装を施している。

しかしそれでも明らかに、自衛の範囲を超える武器を積んだ船が商船団の中に混ざっていた。それが、群れを成して押し寄せる黒帆の海賊船と果敢に戦っているのだ。

「あれがティナエの海軍なのか？」

目を凝らしてみると、海賊と戦っているティナエ海軍艦のマストに海軍旗がはためいていた。

よくよく見れば船首楼甲板には、大型の弩のような武器も装備されている。

彼らは迫ってくる海賊船を追散らそうと、電信柱のような太くて長い弩檣を投射し、無数の弓箭を放って必死に奮戦していた。

しかしその必死さのほとんどは報われていない。海軍の艦艇は、海賊一三隻に対して僅か四隻しかないのだ。あるいはこの戦いの中で、強力な海賊船団に一隻また一隻と沈められてしまったのかもしれない。

ここまで一方的な戦いになってしまっているのは、海賊がこの世界に存在しなかった

はずの新兵器——大砲を装備しているからだ。

海軍の艦隊は、得意とする移乗戦闘を始める前に、大砲でマストを折られ、舵板を割られ身動きを取れなくされてしまう。

そうなると武器を手甲板に集まった水兵達は手も足も出ない。射撃練習の標的のように一方的に狙い撃たれていくだけだ。

これでは海賊に対抗することなどとても出来ない。出来るはずがないのだ。

「くそっ……なんて酷いことを」

大砲の砲弾を四方八方から撃ち込まれた海軍の艦艇は、とても正視できない惨状を呈していた。露天甲板には、動かなくなつた屍が鮮血にまみれて累々と横たわっている。そしてそのまま、船は海に沈んでいくとしていた。

「おい、あの娘まだ生きてるぞ！」

船には、アヴィオン海の風習で船守りという巫女が乗り込んでいる。

その有翼種の女性が屍の間に座り込んだまま、虚ろな表情で空を見上げていた。おそらくあの艦の乗組員達は、彼女を庇って倒れていったのだ。

双眼鏡で様子を見つめていた海自の隊員達は、その娘と目が合ったような気がした。

「くそっ、どうしてこの機には、爆弾の一個も、魚雷の一本も搭載してないんだ！ も

しあれば掩護^{えんご}できるってのによ！」

だが、彼らに与えられた任務は『監視』である。
手を出してはならない。

任務に忠実であらねばならない責務と、目の前で起きている惨劇に対する義憤^{ぎふん}とで板挟みとなった彼らは、砕けてしまいそうなほど力を込めて奥歯を噛みしめたのである。

* * *

黒翼の少女オデイル・ゼ・ネヴュラは、うなじあたりに刺すような気配を感じて背後の空を見上げた。

「ん？」

だが漆黒一色の翼を広げて身を振り^{ひね}、強い陽射しに腹部^{さくら}を曝す背面飛行に移った彼女に見えたのは、水平線から顔を覗かせたばかりの太陽と、空と、雲だけである。

「ちっ、気のせいだよ」

すぐに半横転し、意識を眼下の海へと戻そうとする。

「いや、違うな……」

しかしどうしても疑念^{ぎねん}を拭いきれず、自分の翼から黒羽を一枚引き抜くと、それに透き通すようにして東の空を覗く。すると、太陽の強い輝きに隠されていた何かの正体が見えてきた。

「あれは……ヒコウキ？」

大空とはこれまで、有翼種の縄張りであった。

だが最近はその常識が崩れつつある。ニホン人と呼ばれる連中が持ち込んだヒコウキという魔法装置が、このアヴィオン海の空を飛ぶようになってきたのだ。

もちろんそれらが一機、二機飛んだところで、有翼種が飛べなくなるほど空は狭くはない。しかしその強烈な存在感はどこか古代龍にも似ていて、そんなものがあると思うだけで息を潜めたくなくなってしまふのだ。

「ドラケ！」

すぐに報せようと、振り返って海上に目をやる。

するとオデイルの名を冠した黒帆の海賊船は大砲をぶっ放していた。

「撃てえ！」

船長ドラケ・ド・モヒートの号令^{とてい}が轟くと、海賊船オデイル号は第二甲板（一番

上の甲板を第一として、その下にある甲板の右舷側に並んだ大砲十門を一斉に撃ち放った。

大量の噴煙が、すれ違う形で行き合った海軍の艦との間に立ちこめる。一瞬にして視界が塞がれお互いの姿は見えなくなった。

その一斉射撃は、パンタグリユエル商船団を護衛するティナエ海軍の軍艦からマストを奪った。巨大な帆柱の根本が打ち砕かれ、音を立てて倒れていく。

甲板に大きなラティーン型セイルとそれに繋がった大小の索具が覆い被さる。移乗戦闘に備えて集まっていた水兵達は大騒ぎしながら右往左往し、大混乱に陥った。

「よし、今だ！ 風下に舵を切れ！」

その隙を見逃すドラケではない。船尾楼甲板の右舷に走り寄って敵を睨み付けつつ命令を続けざまに発した。

「ラーラホー船長！」

直後、オディール号は素早い挙動で針路を右に変更。

折れたマストを海中に引きずり行足が止まった海軍の艦は、それに付いていけず無防備な艦をオディール号に曝すことになった。

「撃て！」



再度行われる、舷側に並んだ大砲十門の一斉射。
すると発射された鉄の球塊が敵艦の艦板を破った。

艦尾を形作る船材が木っ端微塵になり、辺りに横殴りの吹雪のごとくまき散らされる。
しかし砲撃はそれで終わりではない。砲手達が大砲に群がって爆轟魔法の充填、弾込め、そして着火……間断なくこの三工程を二回繰り返し返した。

「撃て！」

「撃て！」

この三連撃で、海軍艦の中は滅茶苦茶になっているはずだ。何しろ一抱えもあるような大きな鉄塊が都合三十発、爆轟魔法の力で打ちこまれたのだから。

こんなものが艦の弱点である艦から飛び込んで艦内で跳ね回ったらどうなるか。

身体を掠めただけで、タフネスを気取った屈強な戦士もたちまち血袋肉塊と化してしまふ。

そして鎖に繋がれた漕役奴隷達も、それぞれの座席に繋がれたまま逃げることも出来ずに絶命していった。

「よしや、とどめだ。とどめを刺せっ！」

「そうだそうだ、海の藻屑にしてやれ！」

戦いの熱狂に興奮した海賊達が、更なる砲撃をとドラケに求めた。彼らは憎い海軍の艦を徹底的に破壊し尽くし、海に沈めることを求めている。

しかしドラケはこの艦との戦闘はここで終了だと宣言する。

「なんで!?」「どうして?」

「馬鹿野郎! 海軍なんか相手にしたって何にも得られるものはねえぞ。狙うならお宝だろう!? お宝をたんまり積んだ商船を狙うんだ! それとも、お前達の腹はもう一杯か? これ以上は食い切れないってか?」

ドラケはそう言って、獲物となるパンタグリユエル商船団の方角に船を向けるよう命じたのである。

「そ、そうだった!!」

戦いの興奮で我を忘れていた海賊達も、自分達の狙いが何であるかを思い出した。そして航海士の指示に従って甲板を走り、帆の向きを変える索具を引っ張って、金銀財宝をたつぷりと積み込んでいるはずの商船群へと触先を向けたのである。

「ドラケ! ドラケったら、ドラケ! 返事しろよ!」

高度を下げたオデイルの声が、マストトップで見張りをする乗組員の耳に入ったのは、そうした作業の喧噪が一段落ついた後だった。

海上の戦いは、芝居^{アニメ}や御伽草子^{マシガ}のようにテンポよくは進まない。

戦っている最中はもう「頭や身体が一つじゃ足りん！」と叫びたくなるほど忙しくなるのに、それが終わって次の獲物に追いつこうとすると、途端に暇になる。

特に帆船同士の戦いは同じ風を受け、どちらが速く進めるかを競う、船の性能比べ、乗組員の技量比べでもある。手巾でも洗濯物でもとにかく風を受けられるものを帆柱にぶら下げ、相手に追いつこうとするのだ。

相手だって命が懸かっているから必死だ。なんとか引き離そうと工夫する。

船の性能、乗組員の技量と根性——この差が明確ならばあつという間に追いつき、あるいは突き放されるが、拮抗していると、何日も、下手をすると何十日も、どちらかが諦めるまで延々と追いかけてしまうといったことが起こるのだ。

そうになると、目と鼻の先に敵がいるというのに、次の戦いまで間が空いてしまう。敵愾心を燃やして戦いに挑まんとしていても、ちつとも始まらないため乗組員達は大いに氣勢^{きせい}を削がれることになるのだ。

そんな時にどうするかを考えるのも船長の資質と言えた。

ドラケは甲板に無造作に積み上げてあつた略奪品の箱や樽を、それぞれ船倉^{せんそう}へ移すよう配下に命じた。それらは襲撃初期に拿捕した船の略奪品である。船倉にしっかりと収

めておかなければ、次の戦いで傷物になったり邪魔になったりする可能性があつた。

「へーい」

すると海賊達も、疲れているのにもかかわらず、不平を漏らさず荷物を抱えて梯子段^{はしごだん}の上り下りを始めた。彼らも海賊歴が長いから、いくらイキついても疲れるだけだということを知っているのだ。やれることをやる時にやる。そういう切り替えの速さが、海賊に求められる資質なのかもしれない。

「あと、子供達を休ませろ！ いいな！」

「ラーラホー、船長！」

「お前達も、はしゃいでないで眠れる時に眠っておけ！」

大砲の傍らにいた子供達が「はーい」と声を揃え、疲れを癒やすべく船室に下りていった。すると入れ替わりに掃除の担当者が上がってきて、血で汚れた甲板の掃除を始める。

海賊と言いながらも、オディール号の規律はこのように存外よく守られていた。それも全てはドラケの薫陶^{くんどう}が隔々にまで行き届いているからなのだ。

「お頭！ オディールの奴が叫んでますぜ！」

見張り員のガルツからの報告がドラケの耳に入ったのは、そんな時だった。

ドラケは、振り返りざまに見張り員ガルツの頭を拳でぶん殴る。

「痛っ、何すんすかつ!? いきなりっ!」

「船長と呼べと言ったろっ!」

「す、すみません」

「それと、オディールがあれだけ騒いでるってことは、お前、見張りを怠^{おん}っていたらろう!?」

上空で何やら忙^{せわ}しく舞うオディールを見上げたドラケは、ガルツにそう指摘する。

「す、すみません。つい戦いに目が行っちゃまって。あの凹凸^{おうちう}の少ない細っこい身体じゃ、眺めていても飽きますし、俺としちゃあもつと豊満なほうが……」

「馬鹿野郎。そんなこと本人の前で決して口にするなよ! あいつ案外気にしてるんだ!」

「分かってますって! おいらだってそんなに命知らずじゃねえ!」

「とにかくこれに懲^こりて、二度とオディールから目を離すな。いいな!」

「ら、ラーラホー船長!」

それだけ言い終えると、ドラケは単眼鏡を取り出し上空のオディールへ向けた。すると漆黒の翼を広げたオディールが再び踊るように舞った。

そのバレエにも似た空中舞踊は実はそのまま信号となっている。戦場ではあちこちで大砲が発射され、海賊の雄叫^{おたけ}びや乗客の悲鳴が上がる。そんな環境ではとても声だけの意思疎通は不可能だ。そのために編み出されたのが彼女達の信号舞^{しんごうぶ}だった。

もちろん誰も見てなければ意味はないのだが……

「ガルツ! オディールの信号舞を読み上げろ」

「は、はい。花、黒、青、黄色、……意味は……えっと……警戒、敵、近づく……以上っす!」

ガルツは手元の信号表と照らし合わせながら言った。

「『敵、近づく』だっ!?」

ドラケはオディールの指差す方向に単眼鏡を向けた。すると確かに見慣れない何かが飛んでいる様子が見えたのである。

翼や胴に赤い丸のマークが入っている。噂に聞く二ホンのヒコウキだ。

しかしその動きは、オディールが言うような警戒が必要なものとは思えない。ヒコウキは狩り場となった海域の外縁を、ゆっくりと周回しているだけだからだ。

「ちっ、くそっ。そういうことか!」

しかし、一見無害に見えるその行動が何を意味するかに気付いたドラケは舌打ちした。

「ガルツ、信号旗を掲げる。撤退だ！ ずらかるぞ！ 取り舵!!」

甲板で作業をしていた海賊達は、信じられないものでも見るかのような顔をして、働かせていた手や足を止めたのだった。

船長は、船の上では絶対的存在だ。

乗組員はたとえ納得できなくとも、船長の命令に従わなくてはならない。

「と、取り舵いっぱい」

操舵室にいる操舵長は、首を傾げながらも舵柄^{だへい}を引き、甲板員達も何が起きているのかと疑問に思いつつ、言われるまま帆の向きを変えていく。

オデール号は獲物を追うコースからこうして離れていった。

「船長!? 一体何をやってるんです!？」

するとクォーターマスターのパンペロが血相を変えてドラケの元にやってきた。

クォーターマスターとは、海軍や民間商船にはない海賊独特の役職だ。

船の上では船長に権力の全てが集中している。しかしそれでは乗組員達が一方的に酷使されるだけで終わってしまう。そしてそのままにしておくと、反感を溜めた乗組員が反乱を起こして船長を追放するという結末に向かうことになる。

そういつた事態を防ぐために作られた役職がクォーターマスターであった。

乗組員達の代表として選出されたクォーターマスターは、船長の権力濫用を監視し、海賊活動で得た戦利品の公平な分配を担当する。言わば、企業における組合代表のような立場だ。

そんなクォーターマスターが、ドラケの判断に異議を唱えるのも至極当然であった。

これまでオデール号が海軍の軍船を片付けることに専念してきたのは、パンタグリエル商船団の財貨を奪い取って我が物とするためだ。ここに至るまでの苦勞、血と汗の代価は、これから回収するのである。それを途中で止めてしまったら全てが台無しだ。

「んなことは俺だつて分かてるさ、パンペロ。でも仕方ないだろう?」

「船長、一体何故なんですか?」

「あれだ、全てはあいつのせいだ……」

ドラケは、嫌そうな顔をしながら空に浮かぶP3Cを指差したのである。

オデール号のマストに、するすると信号旗が上がる。

黄色、緑、白、青……色とりどり、様々な模様の旗が並ぶそれは、ドラケから全海賊

船に向けて退却を指示するものであった。

すると三隻の船が、『了解』を意味する旗を揚げ、オディール号の後ろを追従するべく針路を変える。だが、他の海賊船は彼の指示に従う素振りを見せなかった。

「ちつ、くそっ！ どうして奴らは俺に従わない！」

パンタグリユエル商船団のような大きな獲物を襲う際、海賊は他の頭目に声をかけて複数の船団を集めて仕事をする。そうしないと護衛に付く海軍の艦と渡り合えないからだ。それゆえ今回は、ドラケが率いる四隻の他、ダーレル海賊船団から五隻、ブラド海賊船団から二隻、そして単船海賊が二隻参加していた。

もちろん指揮系統がバラバラでは数の力を活かせないから、最初に獲物を見つけた海賊船団の頭目——今回の場合はドラケだった——が襲撃を仕切るのがしきたりだ。だが、そのドラケの退却指示にもかかわらず、ドラケの船団以外は従わなかったのである。

「みんな獲物に夢中でこっちを見てないんじゃないすか!？」

きつと戦いとお宝と女に夢中なのだと信号手のガルツは言った。
そんなのはお前だけだ、とはドラケも言えなかった。

見張りがよそ見をするなど海軍や民間商船なら厳罰ものの行為だが、ならず者ばかりが乗り込む海賊船では、そもそもそうした厳正な規律を求めること自体に無理があ

る。退却の指示に素直に従うドラケの海賊団員のほうがむしろ珍しいのだ。ガルツもオディールの信号舞を見逃したが、それも随分マシなほうだった。

「くそっ、なんてこった!？」

ドラケは頭を抱えた。

「どうしますか船長?」

「仕方ない。航海士！ 船をモナム号に寄せろ!」

ドラケの命令は、航海士によって具体的な指示に翻訳されて甲板員に伝えられていく。操舵室で操舵長が舵柄を引き、掌帆長しょうはんちやうの指示で帆の向きが変えられ、またしても船は針路を変えた。

「船長、一体何しようってんです?」

クオーターマスタールのパンペロが問いかけてくる。

「ダーレルの野郎が信号を見てないってんなら、直接言つてやらなきゃならんぞ!？」
お前達、俺が戻るまで待つてろよ」

「まさか、モナム号に乗り込むんですかい? 他所よその船に勝手に乗り込むなんてことしたら、ダーレルのお頭にぶつ殺されちまいやすぜ!」

「馬鹿言うな、いくら奴でもいきなりそんなことはしねえよ」

自分のことは船長と呼ばなければ怒るくせに、他の海賊団の頭目ならば気にしないドラケは自信ありげに言った。

「しないよな？」

いや、彼自身もそれほど自信はなかったらしい。しかし同意を求められてもパンペロには答えようもなかった。

ドラケの目指すモナム号は、ダーレル・ゴ・トーハンが船長をしている船だ。

ドワーフ種のダーレルはもともと船大工だった。

気性が荒く度胸もあり、しかし悪知恵も回ったため、何かと海賊に頼られることも多かった。そのため船匠長として船に乗り込むようになり、いつしか船長になった。そして今では大小数十隻の船を従える海賊集団の頭目として、アヴィオン海賊七頭目の一角と目されるまでに成り上がったのである。

ダーレルは今回の襲撃でもその悪知恵を遺憾なく発揮していた。

海軍のような手間がかかりながらも利益の少ない相手はドラケに押しつけ、自分達は商船団から零れるように逃げていく小型の商船をもっぱら襲っていた。

それは積み荷満載の大型船の優先権をドラケに奪われた腹いせと、出遅れた分を質よ

りも量で取り戻そうとすることでもある。

今もまた、商船団から離れて逃れようとする小型商船の後方から追い縋り、左舷側に回ってその行足を止めるべく大砲を放とうとしていた。

オデイル号は、そんなモナム号の左側へと接近した。しかし戦闘機動中の帆船に舷を寄せるのは簡単なことではなく達人的な操船技術が必要となる。

ドラケが振り返って航海士のスプーニに問いかけた。

「もうちょっとモナム号に寄せられないか？」

「無理だつて船長！ これ以上寄せたら衝突しちゃう！」

二隻の船は波と風に翻弄されながら進んでいる。

概ね真つ直ぐに進んでいるが、波立つ海は陸に例えるなら山と谷だ。駆け上る時は大きく傾き、下り斜面に差し掛かれれば滑って波が作る谷間に落ちる。これを繰り返す訳だから、当然横揺れも大きくなるので、不用意に距離を詰めれば舷側同士が激突し、下手をすると船が損壊してしまうことも起こり得るのである。

「お前なら出来るはずだ、スプーニ！」

ドラケは無理を言いながら帆桁の端から甲板に降りてきている動索の一本に手をかける。そして船縁に足をかけて二隻が最も近付くタイミングをじっと待った。その瞬間を

見計らい、動索にぶら下がって振り子の要領で渡ろうというのだ。
しかしその時だった。

「ぎゃああっ！」

目前のモナム号の舷側に開いた窓から、突如として少女が海へと落ちていった。

「あっ、お、おいっ！」

落下する瞬間のジタバタとした振る舞いから察するに、自分の意思で飛び込んだのではなく、外的な力で放り捨てられたという感じであった。

海に落ちた少女は一旦沈むが、すぐに水面上に顔を出す。そして波間で手足をばたかせていた。おそらく泳げないのだろう。

「おい！」

オディール号の見張りや乗組員達がモナム号の乗組員に伝えようと大声を上げる。しかし大砲の発射音、海賊達の歓声にかき消されてまったく届いていない。

「馬鹿野郎、何やってやる！ 乗組員が落ちたんだぞ！」

そうしている間にも少女は波間に呑み込まれてしまった。

実は海を生活の場としている船乗りでも、泳げる人間は案外と少ない。昨日今日船に乗ったような子供なら尚更だった。

「くそっ」

ドラケは忌々しそうに舌打ちする。そして思い切って海へと飛び込んだのである。

*

*

特地の海で用いられる船は、銀座側世界で言うところの『ガレアス型』が多い。

この型は帆と櫂かいという二つの推進機関を持っている。そのため波が比較的静かだが風向きの変わりやすいアヴィオン海での運航に適しているのだ。

しかし最近、海賊の間では少しばかり事情が変わってきていた。

大砲という新兵器が出来るようになったからだ。

問題はこの大砲が鉄の塊くわいだということ。非常に重いため露天甲板にずらつと並べると船の重心位置が高くなり、船が動揺してからの復元性が激しく低下する。簡単に言うると、船が操りにくくなってしまうのだ。

そうなると船足ふなあしが遅くなり、獲物の商船に追いつき難くなる。海賊という本業に差し障りが生じるのだ。

そこで船大工でもあったダーレル船長は思い切って櫂漕室かいそうしつと漕役奴隷を廃止した。

大砲によって衝角しやうかくを用いた戦いの必要性が低下したこともある。無風時は乗組員達を露天甲板に並べて船を漕がせることにして、第二甲板の主を大砲にしたのだ。

これによって船の重心は低くなった。

そしてその結果は良好だった。

彼の工夫は、アヴィオン海諸国の海軍を相手にしても、ほとんど負けることがないという成果をもたらし、今では他の海賊達の多くがそれを真似て大砲を下部甲板へと並べるようになったのである。

海賊船モナム号の薄暗い第二甲板では、ずらりと並んだ右舷側の大砲の隙間で、海賊達すなはちが砂鼠のごとく忙しく働いていた。

「おら、次だ。早く次を撃て！」

船長のダーレル・ゴ・トーハンが、乗組員達を厳しい声で叱咤しったする。

この男、ぬめつとした禿はげ頭と髭面ひげつら、ドワーフ独特の酒樽のように腹の突き出た体躯という容姿である。

その見てくれとすぐに手が出る暴力的な性格もあって、配下の海賊達は彼のことを非常に恐れていた。そのため追い立てられるように働くのだ。

「ほら、急げ、急げ、急げ！ 遅れる奴は大砲の中にその頭をぶち込んでやるぞ！」

掌砲長の合図で、掃除係が大砲の砲口から長いブラシを差し込んで数回前後させる。

続いて火薬役のパウダーモンキー——この世界でパウビーノと呼ばれる少年少女達が、それぞれ担当する砲の尾栓ひせんに手を翳かざし、爆轟魔法を充填していった。

パウビーノとは、広い意味では魔導師だ。

しかしながらここにいる彼らは、実質は魔導師にはなれなかった者とも言えた。

様々な魔法を自在に操るような才能がなく、初歩的な魔法をどうにか使える程度ではない。そのため師匠から魔導師の道は諦めなさいと見切られたのである。

彼らは自分にも魔導が使えると知った時、いずれは大賢者か、大魔導師か……それが無理でも、とにかく平凡とは違う生活が待っていると野心の炎を胸中に灯ともした。

自分はそのあたりの一般人とは違う。将来は安泰だ、という優越感に染まったのだ。それなのに、お前にその能力はないと宣告されてしまった。そうした挫折体験は、幼き彼らの夢や希望、自尊心といったものを粉微塵こなみじんに打ち碎いた。

そんな彼らにある組織が近付いた。その者達は、中途半端な才能を抱えて腐くさってしまった子供達を集めるとこう囁ささやいたのだ。

「お前達の力で、何もかもぶち壊してやればいい。そもそも世の中のほうが間違ってる